

---

# **銀魂 × BLEACH 管理局編**

聖なる焰

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

銀魂 × BLEACH 管理局編

### 【NNコード】

N4746S

### 【作者名】

聖なる焰

### 【あらすじ】

かぶき町でばったり会った銀時と一護は異世界『ミシドチルダ』に飛ばされる。

そこで不良魔導師達のリンチ現場に出くわし、リンチを受けていたユーノを助ける。

しかし、ユーノに黒い虚の仮面のようなものが現れ、ユーノは靈圧と共に転移し、どこかへ消え去る。

直後、二人は不良魔導師達の策略により、管理局に追われる羽目に！しかも、マテリアル三人娘の策略により、銀時を除く万事屋メンバ

ーと、ルキアと恋次、真選組の3人組と日番谷も、賞金首として追われていた！？

彼らを追うは元六課メンバー、茶度と石田、十一番隊、そして月詠！？

一方、ヴォルケンリッターのザフィーラも隠密機動に追われ、ミッドチルダを舞台に万事屋一行と一緒に護達、そして真選組とザフィーラ達のドタバタ逃走劇が始まる！

## OP『風の歌』

ユーザー登録している方でも登録していない方でも感想書けます。

## A・1話『連載系の作品は既にないといひが終わり』（前書き）

ビーチ、始めてまして、聖なる焰です。

夢はアニメスタッフです。

サバサバした性格ですが、よろしくお願ひします。

この小説はVividが舞台です。ヴィヴィオ達も出ます。

## A・1話『連載系の作品は気にならないけれど終わらせろ』

新暦79年。

森に囮まれた草原で

「あぐぼつー?」

瘦躯の男がぶつ飛ばされた。

ぴくぴくと痙攣した直後 気絶した。

「ヤツキーー?」

「バカな!? あの怪力のヤツキーが!」

仲間らしき男達（今やられたのを含め、93人の集団です）がどよめく。ちなみに、男達は身体の一部一部にアーマーをつけ、杖か剣などの武器を持つている。

男達の前には一人の男が立っている。

片方の男の容姿はオレンジ髪に黒い和服、そして包帯に巻かれたデカい“もの”を背負っている……最後に目つきが悪い。

男達は口を開いたオレンジ髪の青年に身構える。

もう片方の男の容姿は袖の短い黒ジャージの上に白い和服を左部分だけ着ており、下は黒タイツ（上の黒ジャージと繋がっている?）で、黒い長靴を履いている。ちなみに頭の髪は水色がかつた銀色の天然パーマで、目つきは無気力そうで、赤い瞳をしている。

「ギャー ギャー つむせえー!」

オレンジ髪と黒和服の男が叫んだ。

「テメーら全員……アレを見ろー！」

オレンジ髪の黒和服は右に指を刺す。

そこには長い金髪にボロボロの縁のスーツに身を包んだ青年が俯<sup>うつ</sup>せに倒れていた。その傍にボロボロの眼鏡も落ちていた。

「あの人はどうして倒れているのでしょうか？」

引き続き、オレンジ髪の黒和服は叫んだ時とは違う敬語口調で質問してきた。

「ハイ、真ん中のヒゲ！！」

乱暴口調に戻り、アゴヒゲの大柄な男に返してきた。

「ひ、ヒゲ……まあ、良い。それは、森に迷って、空腹で倒れたから」

「不正解！！」

オレンジ髪はアゴヒゲに向かつて回し蹴りをかましてきた。  
アゴヒゲは一步下がつてそれによける……

が、

さつきまで黙っていた銀髪の男の蹴りがアゴヒゲの顔面にヒットし、口から血と共に歯がこぼれる。

「ふ、副隊長！？」

チンピラ風の男がアゴヒゲに駆け寄る。

「大丈夫ですか！？」

「ああ、なんとか……っー？」

アゴヒゲの顔色が青くなる。すると、腹を殴り……

「うええええええ」

四つん這いになり、腹ん中にあつた消化中のものを吐き出した。

「ギャアアアアー！？」

部下達が騒ぐ。

よく見るとゲロの中には小さい歯もあつた。どうやら、抜けた歯が喉に入り、ゲロと一緒に吐き出したようだ。

「……えへ、正解は脅える縁のスースさんをテメーらがボコ殴ったからで～す」

ゲロの臭いに鼻をつまみながら、銀髪の男が言つた。

「う、ウソをつくな！」

お、俺達は調査に……ってか、そもそも！ 何を根拠にそんな事を！？」

若い男が否定するが、戸惑つてるのがバレバレである。そして、天パーの男が片手を上げ、手首を曲げる。すると茂みから老人が現れる。

「このおじいさんが証言してくれました」

「そうじゃ、コイツらじや！ コイツらがユーノさんを……」

そう、この老人が一部始終を見ていたのだ。

しかし、何故、この老人は青年……コーンを助けなかつたのか？  
それは、この老人が小心者、すなわち恐れていたからだ。

「チツ、目撃者がいたか！」

全部吐き終えてスッキリしたアゴヒゲの男が杖を構える。

「ひいいい！！

こ、コイツら……魔導師じゃあ！」

杖を構えたアゴヒゲに老人が脅える。

「あ？ でばんす……まど……なんだって？」

老人の言葉がうまく聞き取れなかつたオレンジ髪は聞き返す。

「知らんのか！？ アイツらの持つてる杖は『デバイス』！

科学技術を膨張させた技術『魔法』を操るための機械、いわば操作機のようなものじや！

それらを使う人間は『魔導師』と呼ばブツ！？

老人が解説してゐる途中にビーム弾が老人の頭に直撃し、老人はぶつ飛び、地面に倒れる。

「じいさーん！」

ぶつ飛んでいつた老人に銀色天パーが叫ぶ。 特に心配してない  
ようだが。

先程のビーム弾は男達改め魔導師達の一人の撃つたものだつたのだ。

「おい、テメエら……若い男（俺より年上みたいだけ）の次はこ  
んなじいさんまで痛めつけんのか……？」

オレンジ髪は男達……改め魔導師達に怒りの眼差しを向ける。

「だ、黙れ！！ 貴様ら諸共もふとせ」  
が、 小物つぽい細身の魔導師がマジで小物つぽいセリフを吐きかける

גַּעֲמָנִים

「テ  
カマ  
ゾマアアアアアアアアアツ！？」

昔のSFアニメのキャラの名前を叫びながらぶつ飛んでいき、デ  
かい木にぶつかった。

「オルトオオン！！」

あのオルトンが反撃すら出来ず】！？】

せなみにあの小物はかなりの実力  
まだもとよめく魔道師たち

「さあ……お仕置きの時間だ……！」

巨大な出刃包丁のような刃が出てきた。  
取れた包帯は……否、  
さういふ  
晒は柄から伸びていた。

そして、その切つ先を魔導師達に向ける。  
この刀……否、この斬魄刀の名は『斬月』  
といつ。

「テメーら全員、覚悟は出来てんだろうなア?」

銀色天パーが腰に差していた木刀を抜き、彼もその切つ先を魔導師達に向ける。

この木刀の名は『洞爺湖』といつ。その名は柄にも刻まれてい  
る。

「上等じゃゴルアアアアアア！」

「ジジイと司書長」とブッ殺したらアアアアーー！」

151人の魔導師達は一人の男に立ち向かつていった。

## A・1話『連載系の作品は気にならないが終わり』（後書き）

ちょっと編集しました。

BLEACHの新ストーリーはコンが主役かな？ 新ヒロインと結ばれそうな感じがするし

BLEACHの新OP良いですねえ。

## A・2話『一人無双』

「んわたアアアアアー！」

銀色天パーは木刀を勢いよく横に振るい、向かつてきた3人の魔導師を一撃でぶつ飛ばし、その勢いでぶつ飛ばされた魔導師の一人が回転し……

10人の魔導師達を巻き込み、ぶつ飛ばされたのを約14人減った。

続いて、魔導師4人をぶつ飛ばし、次に6人を空に打ち上げ、5人を木に叩きつける。

これら全て一振りずつやつたのである。

結果、29人撃破。

「うおおおおっ！！」

オレンジ髪の斬魄刀……の刃の面は約4人の魔導師をぶつ飛ばした。

「おら、次いい！！」

オレンジ髪は刃の面で5人の魔導師をぶつ飛ばす。

「もうったアアアツ！！」

上からの叫び声にオレンジ髪は上を向くと、ナイフを振り上げ、降下する魔導師がいた。

しかし、そのナイフの刃は通らなかつた。何故か？それはナイフの刃が片腕に当たり、折れたからだ。

生身の腕で……その驚愕により、魔導師は着地を忘れ、地面に倒れてしまった。

次にオレンジ髪の周囲から槍を構えた魔導師8人が！しかし、オレンジ髪は回し蹴りでその刃を碎いた。魔導師達は恐れをなし、逃げていった。

## 18人撃破。

「きいいさああまああ……」

オレンジ髪の後ろから先程ぶつ飛ばされた細身の男……オルトンが現れる。後頭部から血が出ている。

「さつきはよくも……やつてくれたなあ……？」

オルトンよりもやせた男……ヤツキーも現れる。

「テメーら、さつきの！」

オレンジ髪は振り向くと、ヤツキーが回し蹴りをかましてきた！オレンジ髪はその蹴りを掌で受け止めようとするが、衝撃が肘まで伝わる。

(なんだっ……)の細身で、こんな…………！？ 一番隊の隊長かよ！？)

「驚いたか、黒野郎……俺の2つ名は『怪力』！ 怪力のヤツキーじゃあ……！」

ヤツキーは拳でオレンジ髪の顔を突く。しかし、オレンジ髪はすれ違い際にかわし、刃の面をヤツキーの背中に叩きつける。そう、青白い水色の靈力を纏つた、刃の面で。

「キイイイイイイイイッ！？？」

ヤツキーは奇声を上げ、のたわりまわり、痙攣した後、再び気絶した。

「ウエオレン！？ ウエオレンしつかりしろ！ ウエオレン・ヤツク！？」

オルトンは氣絶したヤツキーの身体をゆさぶる。

(ヤツキーツてあだ名だったのか……)

「貴様アア何をしたア！！」

オルトンの問いにオレンジ髪はそう答えた。

「靈圧を込めた刃の面を叩きつけた」

「れいあ……？」

オルトンは聞き慣れない用語に困惑している。

「はあああつ！！」

次の瞬間、オルトンの目の前にヤツキー改めウェオレンの背中を叩きつけた刃の面が現れた！

対するオルトンは高速移動魔法でそれをよけ、

その次に、地面を蹴り、空に浮かぶ。

「空に、浮いた！？」

「飛行魔法。 魔法の一種だ！」

オルトンは持っていた杖型の「デバイス（持っていたのか）を地上のオレンジ髪に向け、その先端から落雷を落としていった。オレンジ髪は落雷をよけていく。

「これも魔法の一種か！？」

「そうだ、砲撃魔法という。 この雷は魔力変換資質といつもので魔力を変換したものだがね！」

続けて落雷を落とす。

「他にも射撃魔法、魔力斬撃などがあり、 防御魔法には」

言いかけた時、斬月の峰がオルトンの腹にめり込んでいた。

「悪い、勉強はしてつけど、テメーのは面倒くせえ」

「ヒドい」

その言葉を最後にオルトンは森にぶつ飛ばされていき、木々が倒れていく。

「ふう……」

靈子で構成した足場（不可視の足場）に乗り、オレンジ髪は肩に

斬月の峰を置くと、なにかぬりとした感触に違和感を感じ、斬月の峰を見ると……

「うげつ！？」

峰に血がついていた。オルトンの腹にめり込んだ時、出血してしまったようだ。

「やつべーな……」

オレンジ髪はオルトン（の腹）の安全を心配しているようだ。しかし、自分あんなに吹き飛ばしておいて……

銀色天パーとオレンジ髪の闘い様を見たアゴヒゲとその部下達は恐怖により、青ざめる。

アゴヒゲの口が開く。

「こ、コイツら……バケモノか！？」

すると、空からオレンジ髪が降りてくる。そして、銀色天パーもアゴヒゲ達に向かってくる。

「さつきの威勢はどうした？」

「き、貴様ら……一体何者だ！？」

二人は名を名乗る。

「坂田銀時」

「死神代行……黒崎一護」

そう、名乗った。つてか、死神代行？

「おい、お前ら」

オレンジ髪改め一護はアゴヒゲに向けて口を開く。

「逃げんのなら……今の内だぜ」

この一人の眼光にアゴヒゲ達の選択は……

「に、逃げろオオオオオオ！」

逃げる事でした。

しかし、それを見逃す一人ではない。

「待て、ゴラアーー！」

「逃げんじゃねえぞ！！」

その後、46名の悲鳴が入った。

こんな感じに。

## A・2話『一人無双』（後書き）

次回予告は消しました。

章が終わつた時に次回予告しようつと 思います。

それと、二コ二コ動画のタグ検索で出演作ダイジェストでスペース入れて、特定の声優さんの名前を入れたら（『出演作ダイジェスト浪川大輔』って言つう風に）、その声優さんの出演作が見られます。（まあ、出ない事もありますが……）

声優さんの他に作品の名前も出すと良いと 思います（『出演作ダイジェスト ハヤテの「J」とく!』みたいに）

では、また。

## A・3話『虚の仮面』（前書き）

ビーチ、まじか マギカの最終話の感想と動画の一部を見た聖なる  
焰です。

今回、超展開になりますのでご注意を

## A・3話『虚の仮面』

「んで？」

一護と銀時の目の前には顔面が変形した上、縄で縛られた魔導師三人がいた。 残りは気絶している。

気がついたヤツだけ縄に縛って拷問しているようだ。

「なんでアイツを何十人がかりで殴つたりしたんだ？」

「実は……俺ら機動三課はろくに手柄が取れなくて……この辺を漁つてロストロギアを探してたんですが……」

「この辺にいたユーノ司書長に見つかっちゃって……」

「口封じのためにボコボコにしたと」

「ち、違う！」

銀時の言葉を魔導師の一人が否定する。

「アイツ、俺達を見るなりバケモノとか言つて、チヨーンバインドぶつ放してきたんです！」

「…………は？」

「そして、俺達はソイツの腕を押さえつけて……」

「…………ボコボコにしたと？」

「え、ええ……」

(……おい、どういう事だよ?)

(確かに、あの爺さんの話じゃ司書長は社交的で優しい人だったって……)

(けど、「ソイツらの話じゃ危ない厨2b y)

銀時がそう言いかけた時、

「う…………」

俯せに倒れていた緑のスーツの青年……コーン同書長が「つめき声」を上げる。

「そりいや、コイツ診てなかつたな……」

一護は俯せになつていていたコーンに駆け寄る。

ちなみに、一護の実家は『黒崎クリニック』といつ小さな病院で、人工呼吸くらいはマスターしている。

一護は状態を観るために、彼の背中をさわったあと、身体を返す。

「うわっ、女みてえな顔……」

コーンの中性的な顔に驚いた一護は間の抜けた声を出す。  
(乱菊さんか夜一さんにいじられそうだな……)

「って、あれ？」

しかし、一護は彼の顔に違和感を感じる。

「どうした？」

ちなみに銀時はチンピラ魔導師を見張っている。

「いや……」いつの顔さ……

次に一護の一言が「瞬だけ」の状況を揺さぶる事となる。

・・・・・

「傷一つねえんだよ」

「…………はあ？」

「は？」

「え？」

「…………え？」

銀時と魔導師三人は素つ頓狂な声を上げる。

「傷一つ……ない？」

「ああ、服以外、全然傷も汚れも……ん？」

一護はユーノの口を見る。

半開きの口、本来そこから見えるはずの白い歯、垂れた口蓋じがいすい、

太い舌、赤い口内が……ない。

それどころか、よく見ると黒い液体が口に詰まっている。

「な、なんだこりや……？」

一護は黒い液体に人差し指を入れた

その時、

人差し指の一節が一気に弾かれ、指が折れ曲がった。

一護の脳はあまりにも一瞬の出来事に痛みに反応する事が出来なかつた。

そして

「ぎゃええええええええええ！」

「お、おい、どうした！？」

銀時は一護に駆け寄る。

「ゆ、指が！ 人差し指が……っ！」

「ちよつ、何コレ！？ 一体、なにをどうしたらこうなったの！？」

「く、くち……」

「口？」

銀時はユーノの口を見る。

すると、口から黒い液体が溢れ出ている。

「口の、変なのに、指入れようとしたら、指弾かれて……」

「こうなっちまつたと……」

状況を把握すると、銀時は一護の折れ曲がった人差し指に手をか

ける。

「な、なにを……」

銀時は一護を無視し、

七八

と折れ曲がった人差し指を強引に押し戻しやがった。

あびつ！？

「坂田医療拳、奥義『指戾』」

かつじゆく

卷之三

一護にドロップキックをかまされてしまった。

「な、なに」しゃがむテメ!!?」「

そりやいのせりつた!!

「さあ、アローマの次は？」

人が口論している中、ユーノの口の中の

立つていや...

「じゃあ、とコ一ノの口から飛び出しきたー?」

音に気づいた二人が見た時には液体がユーノの顔を覆っていた。

た。

この現象は一人には見覚えがあつた。

(**虚化** ホウワ?)

とある世界のバランスを保つ調停者『死神』が悪霊『虚』<sup>ホロウ</sup>の力を得る現象である。

その死神の代行者である一護はその虚化を利用して事で力を上昇させる事が出来る。

ちなみに一護とは違う世界にいるはずの銀時は何故に虚化を知っているのかと、ジャンプやBLEACHの単行本を読んだので知っている。

液体が形をとり、固定化した時、

「アアアアアアアアアアアアツアアアアアアアアア」

ユーノが奇声ともいえる悲鳴を上げ、彼の身体が浮かび上がり、黒い柱がユーノの身体を包み込む。

「あれは……靈圧！？」

一護は黒い柱が靈圧と知る。しかし、その直後、

黒い靈圧の柱は天に上がつていった。

銀時と一護はその様に呆然としていた。

ミッドチルダの旧市街。

その廃ビルの一つ……の地下。

暗い部屋の中、黄緑に光るモニターが部屋の一部を照らしている。

「……おい

少年が口を開く。髪は茶髪、服は黒い。田元は影で隠れて見えない。

「ん？ なんだよ？」

モニターの前のイスに座っていた男が首を返す。やや低い声からして歳は青年のようだ。

「あれはどういう事だ？」

青年の声に怒気がこもっている。

「あれってなによ」

「どうしてユーノを選んだって聞いてんだ……！」

声に怒氣が増した。すると、少年の身体から靈圧が発生し、周囲の地面が抉られる。

「おう、怖いねえ」

「答える」

「あの司書長な、そつちと一緒に高町なのはと仲が良こうしだ。

恋愛関係つてわけじゃないそつだが」

「……そうか。それがどう……！？」

少年は青年の意図を察する。

「まさか……そのために？」

「そのためつてなに？」

「姉さんやザフイーラ達と鬭わせるためにユーノを……」

「なあに、お前の姉貴共だけじゃないさ。高町なのは、フェイト・T・ハラオウン、そしてクロノ・ハラオウン提督……友人同士が争う様はカメラに抑えておきたい。

それに、高クラスの魔導師が相手なら良い実験になるしな「ハツハツハツハ」と青年は高らかに笑う。

「……チツ……」

その青年に少年は悪態をつき、その場を去っていく。

「どこ行くのよ、きよみ」

名前を呼ばれ、少年はドアの前で立ち止まる。

「散歩がてらにユーノの様子を見に行く……」

そう言いかけた少年……きよみは

「行きます 確かこの近くに送つたんですね？」

先程までの乱暴な口調から敬語に言い替えた。

「いや、クラナガンに変更した」

「クラナガン……首都クラナガン？ なんでそんな所に……」「あそこには高町なのはの義理の娘、高町ヴィヴィオがいる。母のピンチにや娘も駆けつけてくれるだろ。

それに」

「その娘の実力も見ておきたい、ヒン、勝手にしてくだけい」「…………」

そう行つて少年……きよみはドアノブに手をかけた時、ふと思つたように後ろを振り返つた。

「もしや、あの死神代行という方と天然パーマの方も、ユーノと闘わせるのですか？」

「当然だろ、データも入るし」

答えを聞くときよみは舌打ちし、ドアを開け、そのまま立ち去つた。

きよみが出ていった後、青年は端末を操作する。

「さて……」

画面端末には、長い金髪の女性『フュイト・ト・ハラオウン』と、金髪に頭の両脇に小さなツインテールをしたオッドアイの少女……『高町ヴィヴィオ』の顔写真が写つている。ビューやら高町家のデータを調べているようだ。

「……ほお、なるほど……ん、居候？」

データに『家に居候がいる』という記述を見る。少し気になつた青年はページを少し下に下ろしていく。その居候の顔写真が写つていたのだが……

「なつ、なにつ！？ これは……」

長い紫髪を後ろにまとめ、黄色い瞳をした褐色の女性の顔が写つていた。青年はそれを見てこう呟いた。

四  
楓  
院

夜  
一

！  
？

何故  
ここ  
に！

## A・3話『虚の仮面』（後書き）

今回出てきたあよみくんはキーパーソン的な存在になると思います。  
これ出した直後に予告編みたいな出します。

十一月一日AM0:34、あよみくんの台詞を修正しました

## 物語は動き出すか---（前書き）

予告編的なものになります。

この話に出てくるセリフが本編に出るとは限りませんので、この注意を

物語は動き出すーー！

「夜一さん、夜一さん！」

オッドアイの少女ヴィヴィオが階段を降り、居候の女性の名を呼ぶ。

「なんじゃ想像しい」

褐色の女性、夜一が現れる。

「夜一さんーー！ ゆ、ユーノさんが……街で……」

「落ち着け。 最初から話してみい」

夜一は焦るヴィヴィオをなだめる。

「はい……ユーノさんが……なのはママの友達のユーノさんが……」

「ユーノがどうした？」

「ユーノさんが街で暴れてるんですーー！」

「暴れてるじゃと？ 酒に酔つて？」

「違います！ 黒い仮面被つてて……」

「黒い仮面？」

夜一は首を傾げる。

「いつも以上に魔力が大きくて……なのはママとアインハルトさん達でも太刀打ち出来なくて……」

「あのなのはとアインハルト達が？」

「じつから先のナレーションは吉田光央さんで脳内再生してください。

「よし、ワシも行こー！」

「本ですかー？」

「アインハルトは「ロツキを数人ほど倒していくし、元よりあのな

「のはがコーカーなんぞに太刀打ちできぬなど、考へられん。黒い仮面とやらも気になるしの」

そして今

「ノーノー」

ア  
”  
ア  
”  
な の は

物語は動き出す

## ある者達は

「ちきしょオオオオオオオオオオ！－！」

「なんて俺達かこんな目に遭わなきゃいけねえんだよ!!」「それは、<sup>れん</sup>恋じやん、アタシ達が賞金首こなつてゐからアル女

「金額は約五十万だそうだ」

卷之三

「海國圖志」

「ああ、ちと乱暴だが、警察だ」

「僕達も世界のバランスを守る護廷十三隊だけど」

「それは俺達が賞金首になつてゐるからですぜ」

「だから、それがわかんねえつづつてんだよ。」

## 帰るためには

「全てはあの黒猫と俺のせいだ」

「否、あの黒猫こそが、四楓院夜一いのくにやが事ことの元凶げんきゆう」

「いやいや、朽木隊長くぎだつて黒猫に斬りかかってきたじゃないです  
か！　だいたい、あの猫、四楓院元隊長いのくにじゃなくて、ただの猫ねこじや  
……」

「まあまあ、みんな前向きに行こうじゃないか」

「己おのが前向きすぎるんじゃあ……」

「兄けいが前向きすぎるのだ」

「桂さんケイさんが前向きすぎるんでしょーが！」

次にある者は

「ア”アアアアアアア……」

「なのはさん、よけて！！」

「何を呆けておる、貴様……死にたいのか」

大切な人のために

「いくで、狛村さん」

「うむ」

またある者は

「俺達は、世界を滅ぼせる兵器を……」

「我々は、一つの街を滅ぼせる虐殺兵器を……」

「お互い目的のものを手に入れれるまで」

「盟友の盃めいゆうを」

「乾杯」

「己が欲を果たすために

「ウヒヤッヒヤッヒヤー！これは愉快！」

「そこ行けめーがね！そこ行けめーがね……あ～～～！」

「彼らには悪いと思いますが……面白いものですね」

「うむ、これほど良い映画は見たことがない」

果たすために

「……フツ、……フハツハハハハ……ハーツヒヤヒヤッハツハツ  
ハツハツハ

「こいつは良い実験になりそうだ……ハハツ！

そう思つよなア……ええ！？」

またまたある者は

「その服……少々軽装すぎじゃないか？」

「失礼ねえ、これはバリアジャケット！アンタの白服こそ弱そつ  
じやない！」

それに何よ、そのヒラヒラー？なんか金持ちみたいですが、  
ムカつくんですけど！」

「失礼な、これは……」

「あの一人……ホント仲良いですね～。ねえ、さぞやん」

「ああ、ほんとにな」

「己が信念のために

「つ～つ～つ～、つ～～！」

「つ～つ～つ～……つ～……つ～～～！」

「ウニウニウニ、ウニ—」

卷之三

「突いて、突いて、突いて、突いて、」

「突いて……突いて……突いて……突いて……」

「突いつてえ―――つ！！」

「突いてええ―――つ！！」

ノルマニ

卷之三

テソホ早くしニエリカススル

元メリーは女がエリオの方！！！」

「野球」の言葉

卷之三

「わあ…………綺麗…………」

「アリマドシム？ 一いつのが……」

「キユク」（泣）

またまたまたある者は

「姉ちゃん

俺は  
……

いや、  
無い。  
というか、あつた方がおかしいだろ、さよみ……

1

## 何かのために

「行くぜ……

銀さん

闘うために

「おひ……

一護

その者達が出会った時……

物語は、動き出すッ！――！

銀魂アーバンブリューチャンネル  
銀魂 × BLEACH —管理局編

ス、タアアアアトオオツ――！――！

## 物語は動き出すーー（後書き）

さあ、次回からは第2話……いえ、第一話のBパートに突入します。気づいてると思いますが、サブタイトルを第1・話形式に変えました。

ちなみに前回、空気になっていた魔導師たちは隙を見つけて逃げようとしたら、銀さん達に見つかり、フルボッコにされました。

## B・1話『逃亡』（前書き）

新八達のターンです。

そろそろ〇九とEの構成仕上げないとな……

## B・1話『逃亡』

ビルに包まれた街を四人組が走っている。その後を追っているのは、機械的な杖を持つた男達。

「ちきしょ オオオオオオオオ！－！」

叫び声が木靈する。

叫んだのは四人組の一人の少年。

髪は丸い黒髪、顔つきは今は少々崩れているがやや綺麗な童顔、その目に眼鏡をかけている。

服には青縁の灰色の和服と青い袴を着用した少年。

「なんで俺達がこんな日に遭わなきゃいけねえんだよおおおおおおおお！」

次に叫んだのは赤毛の男。

髪は、後ろにまとめた赤毛、左のこめかみのところで結んだ白いハチマキ、顔つきは眼鏡の少年よりも少し細く、アゴが少し長く、本来目つきは鋭いのだが、今は大きく見開かれている。

服は、袖の大きい黒い和服に黒い袴を着ており、腰には刀を差している。

「それはね、恋じゃん、アタシ達が賞金首になつてゐるからアルよ」  
赤毛の男に向けて言つたのはチャイナ服の少女。

髪はオレンジ色のセミロングを両サイドでぼんぼり団子にしてまとめ、その上に黒いアクセサリー（？）のような黒い半球体を被せている。目は大きく、瞳は可愛らしい青色。

服は、金の縁のついた袖が長く大きいチャイナ服を着ている。

おかしな所は・・雨でもないのに紫の傘を差しながら走っている所か。

「金額は、全員約五十万だそうだ」

続けて言つたのは黒い髪、黒い和服の黒一色の小柄な少女。その黒い髪の形はやや丸いセミロングで後髪が少し跳ね上がつており、真ん中辺りの前髪が左斜め下に向かつて伸びている。

目つきは丸いが、端でとがつてあり、その中の瞳の色は黒い。服は赤毛の男と同じ黒和服に黒袴。もちろん腰には鞘のついた刀が差してある。

「だあっから、それがわかんねー一つってんだるーがああああ！！！」

赤毛の男はまたも叫ぶ。

「大体、俺達が何したよ！？　俺はルキアのあんみつしか……あ」「なん……だと……！？」

「恋次……あれは貴様の事だつたのか……！」

ルキアは腰に差された刀の柄に手をかける。

「ちよつ、待てルキア今はそんな時じゃねえだろ！」

「問答無用！」

そう言つと、ルキアは腰に差した刀を鞘から抜き、

「舞え……袖白雪！！」

力の入つたその言葉と共に、四角かつた刀の鍔<sup>つば</sup>が白い円形に変わり、刃と柄の色が純白に変わる。柄の後に晒<sup>さけいし</sup>がついている。

これこそがルキアの斬魄刀『袖白雪』。前回の一護の斬魄刀『斬月』と同じ斬魄刀であり、ルキアと恋次は斬魄刀を操る死神である。

ちなみに一護はその代行者である。

斬魄刀にはそれぞれ能力があり、その能力は普段は封印されているが、その能力の開放を『始解』<sup>しかい</sup>と呼ぶ。一護の斬月は最初から始解に入っている常時開放型の斬魄刀である。

「ちよつ、ルキアさんなんにやつてんですか！？」やめ

參の舞

を作る。  
しらふね

氷で長くなつた刃を恋次に向けて振るつ。

恋沙はそれを厭んでよに イカレたよに変なわれわれ声を口走

「 ちよつ、恋次さん！？ 大丈夫ですか！？  
つてか、ルキアさんも何やつてんすか！？

新ハ達は走っています。走ったまま口論しています。

貴様も斬り殺されたいか！！！

追つていた魔導師達も一行の様子に気づく。

「あ、ああ。おおい？」なんか様子がおかしいぞ」「仲間割れか？」

「加勢するアルよ、ルキア。 新ハイイ、 いつぞやの炒飯の恨み、  
今ここで晴らしてくれるわア アアア !!!」

「お前もかいイイイイイイイイイイイイイイ！」

二人はそれぞれの得物（神楽は傘）を振るい、一人をぶつ飛ばす。しかけるが、二人はそれをかわす。

「ま、誠つて、」

「誰だあ！？」

新八と恋次は謎の叫び声に交互につっこむ。流石ジッコ!!コノ

死んで諒ひそ  
恋次！」

死ねエエエエ新ハイハイハイハイ

新八達は走っています。いつの間にか管理局からルキアと神楽に追われる身となりました。

「あ、おい、死ねとか言わなかつたか今！？」  
「あ、ああ。一本二本うなづこござ！」

新ハ達の拳勘ニミツ尊師達も不審ノ思ハセ

新八達の拳動に魔導師達も不審に思い始める。

「へ、ヘルペス！！ ヘルペス＝イイイイイイイイイイ－！－！」

「し、新八、ヘルプミー！ ヘルプミーな！ ヘルプミィイイイイ

突然、ルギアと神楽の足が止まる。

גָּדוֹלָה מִזְרָחָה

「んな事良いから逃げますよオオオオ！！」

「え、逃げるつて……アイツら追つてこなく……」

恋次は本来、自分達を追っていた人間の事を忘れていたよ。

「？」

「あ？」

恋次は後ろを振り向くと魔導師達が迫っていた！

「……あー、いたなこんなヤツら……って、逃げろおおおお……！」

恋次は新ハに続いて逃げる。

「逃がすかあ！！！」

「追えヒヒヒ追つんだアアアアアア……！」

その後、新ハと恋次はなんとか路地裏に逃げ込んだ。

**B・1話『逃亡』（後書き）**

まだまだ続きます。

## B・2話『対峙』（前書き）

どーも、スランプになつてゐる様子の聖なる焰です。  
原作でいつも強すぎる敵にぶちのめされてばかりいる恋次に見せ  
場を作つてます。

恋次ファンは終盤に注目！

## B・2話『対峙』

二人は地面に尻を預け、息を切らしていた。

「はあ……はあ……もう追つてしませんよね……？」

「多分な……」

しかし、なんでアイツら急に……」

「アイツらって……神楽ちゃんとルキアさんの事ですか？」

「ああ」

「そういえば、あの一人、あれつきり追つてこなく……」  
新八がそう言いかけた時、

「その二人ならここにいるぞ！」

大きな声と共にスポットライトが一人を照らす。二人は光から  
目を腕でかばう。

照明が消えていき、声の主が現れる。

その男とは……

「ああっ！ アンタはっ！？」  
「俺達を追つていた！」

新八達を追つていた魔導師達の隊長だつた！ ちなみに身長は高く、ほほ痩せた体格をしている。

「フフフ、これを見ろ！」

そう言ひつと、隊長は人差し指を後ろに向けると、

「か、神楽ちゃん！！」

「ルキア！？」

縄に縛られ、大柄な魔導師に背負わされた神楽とルキアが！ しかも二人とも皮膚の一部一部が黒く焼けており、目を回している。

「一人を人質にして僕達を捕まえる気か！？」

「話が早いな、さあ大人しく……」

「ちょっと待て！！ テメーら、どうやってその一人を捕まえた！？」

「つか、どこに行つてたコイツらー…？」

恋次の戸惑いも最もだ。

ルキアは死神が使う魔法のよつた術『鬼道』の達人、神楽も岩すら持ち上げる怪力の持ち主、どちらも実力者だ。その二人が大勢とはいえ、魔導師達に負けるとは思えない。

「ああ……ファミレスで食い物くれとか言って立てこもつててな（オイイイイイイ、なにやつてんの神楽ちゃんんんんんんん！？）（なにやつてんだよルキア！？）

「通りすがりの赤いサラサラヘアーに、左の頬にバーコード、黒いコードの魔導師にやられ、そこを我々が回収し……今に至るというわけだ」

「多い！！ 魔導師の特徴多いわ！！」

「つてか、あの一人を倒したって……その魔導師つて一体……！？」

「まあ、良い。コイツらの命が惜しきば投降しろ」

「はっ！ 僕達がんな脅しに乗ると思ってんのか！？」

「ほお～、この一人の命が惜しくないのか。

ひどいなあ～、最低だな～」

隊長は卑しい口調で恋次を挑発する。

（どうするんですか、恋次さん？）

（ああは言つたが、俺も一人が心配だ……とりあえず隙を見て……）  
新八と恋次は小声で作戦会議を行う。  
そこで……

「隊長！ ランスター執務官が……」

部下の一人が何かを報告する。その時、魔導師達の目がその男にいく。

「今だ、新ハ！！」

「はいっ！！」

その隙を逃さず、新ハと恋次は一気に駆け抜ける。

隊長は口を開ける暇もなく、恋次の草履に顔を踏まれ、倒れる。新ハは腰に差していた木刀を抜き、

「せええええ！！」

神楽とルキアを抱きかかえていた魔導師の腹を突く。その一撃に魔導師は吐血し、二人の少女を落とす。

「神楽ちゃん！！ ルキアさん！！」

新ハは地面に落ちた二人の少女に駆け寄り、その名を叫ぶ。

「どうだ、新ハ！？」

二人の安否が気になる恋次が新ハに二人の様子を聞く。

「大丈夫です、気絶してい……」

新ハがそう言いかけた時、恋次の後ろに魔力を纏った杖を振り上げる隊長が！

「恋次さん、後ろつ！！」

恋次はなにっと後ろを振り返った時、

隊長が杖を振り下ろし、恋次の頭に直撃した。

「恋次さん！！」

「フツフツフ、一人目捕獲……ん……？」

隊長は恋次に叩きつけた杖を見ると、ボキッと折れて、地面に落ちた。

「は……え？ え、えあ、あ、ああ！？」

隊長は自分の杖が折れた事に困惑している。

「いつ……てーじゃねーかコラ！！」

恋次は隊長の襟首を掴み、額をぶつけた。

「へらつ……！？」

数歩後退すると、隊長は仰向けに倒れ、気絶した。

「た、隊長！？」

「野郎、なんて石頭だ！」

隊長が気絶した事に部下達は驚く。

「れ、恋次さん！ 大丈夫なんですか！？」

「俺は副隊長だぜ？ あんな杖でやられると思つてんのか？」

(ふ、副隊長?)

(組織なのか?)

魔導師達は念話で話していると、

「やれやれ……相変わらずだね、阿散井くん

B・2話『対峙』（後書き）

最後の声は……BLEACHファンならおわかりでしょうね。

B・3話『再会、そして……？』

上から男の声がした。なんか工口い男の声がした。

恋次達はもちろん、魔導師達も上を向くと、

男がベランダの上に立っていた。

男の髪は黒髪で、整った顔立ちの上に眼鏡をかけている。服は白い西洋的なもので、

肩には短いマントのようなものをかけ、

胸のところではピンのようなもので止められている。

恋次はその男の顔を見て、じついつた。

「石田……！」

「なんだ貴様、何者だ、と魔導師達が叫ぶが、若い女の声にかき消される。

「民間協力者よ、私の」

声の主は女性だった。

髪はオレンジのストレートロングヘア、

服装は縁の青い白ジャケットに、

その下に胸元が赤い黒ワンピース　？　、

腰には上のジャケットと同じ色合のスカート、

その上には銃が収納されたポケット……のついたベルトが巻かれている。

「じつ、これはランスター執務官殿！？」

魔導師達が一斉に姿勢を正す。じつやら、あの少女は高位の職に就いているようだ。

「何故、凶悪事件担当のランスター執務官がここに……？」

「ティアだけじゃありませんよ…」

「俺達もいる」

活発な少女の声と渋い男性の声が聞こえた。 声の主が顔を、いや姿を現す。

一人は少女。

髪の色は紫、顔立ちから見れば十代後半か。

女の方は胸の部分に水色のラインの入った黒いシャツ、その上に青いラインの入った白いコート、

両腰にアーマー、

水色の短パン……更に特徴的なものは右腕に巨大な籠手、両足には機械的かつほぼ巨大なスケートブーツ、そして額に巻いたハチマキ。

もう1人は大柄な男性。

黒い前髪で両目が覆われ、顔の肌と大きな両腕から見られる褐色の肌、やや厚い唇、良い体格から20代と思われる。

服装は上半身にピンクのアロハシャツ、

下半身にはジーンズと、やけに現代的な格好をしている。

「れ、特別救助隊の、な、ナカジマ防災士長！」

「どうして特別救助隊が……！？」

魔導師達がざわめきだす。

「な、なんですかあの人達？ なんか偉い人っぽいんですけど……」

「……チャド……」

恋次は大柄な男にそう呟いた。

「チャドじやねえか！？ お前、どうしてここに……」

「阿散井……」

大男が口を開く。 しかし、次に返ってきた言葉は……

「お前達、何をした?」

B・3話『再会、そして……？』（後書き）

次回、バトル突入！  
なんか展開が早いので、ご注意を

## B・4話『衝撃の結末』（前書き）

ご一も大変お待たせしました。

しかし、最新話なのになくなってしまった……

## B・4話『衝撃の結末』

沈黙がこの場、路地裏を支配する。

「は？」

「いや、だから、お前達、何をしたんだ？ 賞金首、しかも五十万  
なんて……」

「……いや、それはこっちが聞きたいぐらい、……」

「まあ、何にせよ」

オレンジ髪の女は腰のポツケから銃を取り、  
「事情を聞いた方が良いわね、力尽くで」

「そうだね、ティア！」

オレンジ髪は銃を、

青髪の少女も拳を構え、

続けて石田と呼ばれた眼鏡の青年も蜘蛛の巣状の光を形成し、  
大男もボクシングの構えをとる。

「ちょっと、ま、まさか……！？」

おどける新ハは思い出そうと思考する。 さつきオレンジ髪の女  
が石田達を「民間協力者よ、私の」と言つていた……。 まさか！  
「ま、まさかお前ら、ソイツらとー！？」

恋次も声を荒げ、眼鏡の青年に返答を申し込む。

「実はちょっと前に……」

次の瞬間、石田のセリフはかき消される事となる。

GISHA AAAAAAAA AAAAAAAA AAAAAAAA AAAAAAAA A

AA ! ! !

「どうからともなく路地裏に響いてきたこの叫びはその場にいた者

達の耳をつんざき、ある者は耳から血を噴き出し、氣絶、またある者は鼓膜を破られ、血が垂れ出る耳を抑える。

新八達と石田達は鼓膜が破れぬように耳を抑えている。やがて、叫び声は止むと、路地裏にいた者達は皆、氣を失い、そのまま倒れた。

首都クラナガンは燃えていた。

ある者は逃げ惑い、  
ある者は死に絶え、  
またある者は人助け、  
またある者は立ち向かう。

この都を燃やした仮面の怪物に。

GISHA A A A A A A A A A A A A A A A A  
AAA ! ! !

## B・4話『衝撃の結末』（後書き）

いやーマジ ああ ああでしたよねえ……？

ネタバレになるかもしない説明

叫び声は怪物のもので、近くにいる人間にはただのうるさい鳴き声にしか聞こえませんが、遠くに行くと行くほど音波になってしまふわけですよコレが

しかし、声には催眠効果もありますし、気絶してしまうわけです。恋次達は倒れましたが、意識は失つておらず、身体が動かないといった状態です。新ハは強くても人間、そのまま眠つてしまつたわけですこれが（新ハエ……）

さて、次はなのはさん出ますが……原作のよつになのはさん活躍で起きるかどうかわかりませんので、ファンの方は「注意ください

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4746s/>

銀魂×BLEACH 管理局編

2011年11月11日02時53分発行